

第 18 回英語語法文法セミナー

テーマ「英文法の周縁に光を当てる－例外から規則へ－」

司会・講師 濱松純司（専修大学）

講師 牛江一裕（埼玉大学名誉教授）

講師 滝沢直宏（立命館大学）

講師 林龍次郎（聖心女子大学）

日時： 令和 4 年（2022 年）8 月 8 日（月）13:30～17:30

会場： オンラインで開催

参加費： 無料

プログラム：

13:30～13:40 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明

13:40～14:20 濱松純司（専修大学）

「受動名詞形の性質－例外から規則へ－」

14:20～14:25 -----休憩-----

14:25～15:05 林龍次郎（聖心女子大学）

「修飾語句の英文法－“people locally”や“silky smooth”は例外なのか－」

15:05～15:10 -----休憩-----

15:10～15:50 滝沢直宏（立命館大学）

「典型から外れる語法文法－age の用法、下位を表す最上級、同格名詞節を導く that の省略などを例に－」

15:50～15:55 -----休憩-----

15:55～16:35 牛江一裕（埼玉大学名誉教授）

「何が例外なのかを考える－譲歩構文、存在文、冠詞－」

16:35～16:45 -----休憩-----

16:45～17:25 質疑応答

17:30 セミナー終了

※ 本セミナーは、学会会員以外の方を含めどなたでも参加できます。参加ご希望の方は英語語法文法学会ウェブサイト (<http://segu.sakura.ne.jp>) にアクセスし、申込フォームに必要事項を記して下さい（6 月上旬に詳細を同サイトに掲載します）。申込み締め切りは 令和 4 年 7 月 30 日（土）です。お申込みいただいた方にアクセスに必要な情報をお送りいたします。ウェブ会議アプリケーションの参加定員に達し次第募集を締め切ります。必要な方にはセミナー受講証明書を発行いたします。

各講師の発表概要

全体の概要及び趣旨

本セミナーの趣旨は、英語の文法において、例外とされてきた事象に光をあてて考察することである。理論言語学では、核文法 (core grammar) という術語が示す通り、ややもすると例外を周縁として切り捨てる傾向が見られるが、本セミナーでは敢えて文法における例外に注目し、そこから規則性を見いだすことを試みる。

本セミナーでは、英文法の例外的・周縁的な事象から規則に到達するという視点から、4名の講師がそれぞれ多様な事象・構文を取り上げ、セミナーの趣旨に則り、中学・高校の英語の授業に資する内容を提供すべく、出来る限り平易に解説するように努める。

受動名詞形の性質－例外から規則へ－

濱松純司 (専修大学)

Noam Chomsky (1970) の論文 *Remarks on Nominalization* でも指摘されている通り、動詞及び文と比べた時、派生名詞や名詞句には例外が常につきまとうと言える。

本発表では、*the patient's examination by the doctor* のように、属格名詞句 (*the patient's*) が派生名詞 (*examination*) の目的語として解釈される、受動名詞形と呼ばれる名詞句を取り上げ、属格名詞句が目的語として解釈を受ける為に必要な条件を考察する。その過程で多くの例外が観察されるが、例外をつぶさに検討することにより、実はその多くが規則に従っていることを論じる。

とりわけ、この事象において見通しを得るには、意味だけでなく、名詞の形態と性質、具体的には派生名詞の接尾辞及びロマンス・ゲルマン系の区別を考慮する必要がある点を示す。その帰結として、一見して「例外」と思える事象を規則に帰することを目指したい。

修飾語句の英文法－“people locally”や“silky smooth”は例外なのか－

林龍次郎 (聖心女子大学)

本発表は、英語における修飾語句の中で例外と考えられるものについて考察し、修飾という現象全般について検討する。主な対象とするのは「名詞を修飾する副詞」や「形容詞を修飾する形容詞」である。

前者は、*people locally*, *their financial success internationally*, *the situation recently in England* のように、一般に名詞を修飾するとはされていない副詞が名詞を後置修飾している場合である。後者は、ふつう形容詞を修飾するのは副詞と考えられているにもかかわらず、*silky smooth*, *dark brown*, *deep red* のように、形容詞を別の形容詞が前置修飾していると考えられる場合である。

「英語における前置修飾および後置修飾」という大きな視野から考えた場合、その中で上のような例外はどう位置づけられるかという観点から論じていく。

典型から外れる語法文法－ageの用法、下位を表す最上級、同格名詞節
を導く that の省略などを例に－

滝沢直宏（立命館大学）

周縁的現象は多々あるが、本発表では、中学あるいは高校の段階で必ず目にしている「周縁」に目を向ける。それでも、扱うべき現象は多岐にわたる。高校段階で使われる文法の参考書では触れられていないが、心得ておいた方が良くと思われる現象を対象とし、特に、英語学的にも興味深いものを取り上げることとする。とりあげる例は、(1) He entered the university at the age of 18. はなぜ「18ヶ月」ではなく「18歳」と解釈されるか、(2) 最上級形は基本的に首位あるいは上位を表すが、どのような場合に下位であっても使用可能であるのか、(3) 通常は省略不可と言われている同格名詞節を導く that が省略される事例は実際には多々見られるが、それはどのような場合に起こりやすいか、である。全体を通じて、「基本から外れた例外」をどのように考えるべきかを考える。

何が例外なのかを考える－譲歩構文、存在文、冠詞－

牛江一裕（埼玉大学名誉教授）

一見「例外」ではあるが、詳しく見てゆくとより大きな原則に従っていて、その意味では例外ではない場合がある。また、例外的な性質を持つてはいるが、どこが例外なのかを捉え損なっているという場合がある。さらに、外国語としての英語学習者にとっては例外的だが、母語話者にとってはそれほど例外的ではないという場合もある。本発表では、このように、ある意味では例外であるが、じつはより深いところで原則や規則に則っていると思われる事象について考察する。それぞれの具体例として、as や though を用いた譲歩構文では名詞句に冠詞が現れない (Genius though he is, ...) こと、存在文は倒置による構文ではなく、たしかに例外的な特徴を持っているが文法的に規則的な部分が多いこと、教科書には現れない定冠詞の用法だが母語話者では比較的早い段階で習得される用法、を取り上げ、英語教育の観点を交えて考えてみたい。